

Bimonthly for Guitar

ARMONIA

Vol. V-No. 5 Sept.-Oct. 1958

アルモニア

第五卷第五号 (通刊29号)

昭和三十三年九・十月

Editor: Dr. Isao Takahashi (Sakamoto, Miyagiken, Japan)

Associate editors: Seiichi Konishi, Jiro Nakano. Kojiro Kofune.



日本のギター音楽が国際場裡に進出するという事は愉快である。これはわが国のギター音楽史に一つのエポックを画することになるかも知れない。その点でその衝にあたる私達の責任は重且つ大である。それを自覚すればするほど、會議に臨む心構えと準備に万全を期さないではいられない。ステージマナーは勿論、私的行動に於ても慎重であらねばならないことを心掛けてゐる。

武井守成、中野二郎、小船幸次郎、古賀政男、間宮芳生などの諸氏の作品がどんな反響を生むか、それを見きわめたい。そして邦人作品と共に中出阪蔵、加納実、河野賢、小石川義行の製品が世界の市場に進出することになれば、これはまことにうれしいことである。そして私達の仕事が国際親善の一助になればこれ又幸なことである。

目 次

(第5巻第5号・通刊第29号)

表紙：中野二郎

小西誠一：日本のギター音楽界	(1)
中野二郎：随想	(4)
高橋 功：Almeidaのギター教本抄	(6)
作曲コンクール審査発表表	(8)
中野二郎：審査を終えて	(8)
小船幸次郎：本格的作品がない	(10)
時評	(12)

Jacq Witte, 小原安正、高嶺巖、

小原聖子、荷見トリオ、佐々木アンサンブル

小原安正：間宮芳生氏のギターコンチェルト	(17)
高橋 功：私の渡欧について、三たび	(18)
高嶺 巖：渡欧の御挨拶	(20)
海外ニュース	(21)
国内ニュース	(25)
誌友の声	(28)

添附楽譜 (1) Jacq Witte 作 Pierrette (三人の遊ぶ子より)

(2) 田中常彦作 荒城の月変奏曲

編集顧問

中野二郎、小西誠一、小船幸次郎

日本のギター音楽界

(始めから今日まで)

Gitaristik in Japan

小 西 誠 一

Seiichi Konishi (Kamakura)

四月にゴンザレスが第1回演奏会を日比谷公会堂で開いた時あの大きいホールが殆んど満員になったのに驚いた事、そうなのは日本に於けるギター愛好心が意外に高まっていると考えるより他はなく、このギター熱に対しても驚きを抱いた事は本誌第5巻第3号の「ヘス・ゴンザレスを聴く」の中に書いた通りである。その時私は今日迄日本のギター音楽がこゝ迄盛り上って来た経過を振り返って見た。そして盛り上がり方が戦後特に著しく、それが戦後の日本ギター音楽界の特徴でもあり、新事態でもあるという結論に達した。

そこで「戦後のギター音楽」に就いて放送させて貰おうと思ってNHKの日曜日の音楽クラブの担当者に申込んだ所がギター音楽に就いての放送は始めての事だからというので「最近のギター音楽」という題で初歩的の事から外国のギター音楽の現状迄を含んだ内容に変更し、9月14日午前10時から35分間座談と実演を含んで放送された。

それはそれでいいとして私は矢張り自分の考えた日本ギター音楽の発展の概観を一度やって見度く思うので高橋君の了解を得て本稿を書く事にした。尤も本稿の内容は相当放送の時に取入れたからも一度本稿の中に出て来る事になる。

日本に始めてギターがはいって来たのが何日かは今の所全く知られていない。正確にそれをつき留める事は至難の業だろう。外国との交通が始まった初めに遡って、外国船の船員や乗客が持って来た事を想像すると少くとも徳川時代、或はそれより前の織田信長時代という事も考えられる。然しそれを確認する材料を見附ける事は一寸出来そうもない。その研究は今後に待つしかしかたがない。

然し日本人によってギターが持って来られたのは可なり古い事が放送後に分った。放送の時、今から54年前の明治34年に日本のマンドリン合奏の生みの親である比留間賢八氏がイタリアで習ったマンドリンとギターを持って帰えられたといったが、その後ふと武井さんが大正13年に著わされた「マンドリン、ギターとそのオーケストラ」をあけて見たら「鉄道界の恩人であり、又平岡大尽の名を以て知られた平岡瀧氏が米国留学中にギターを学んで帰朝後も之を奏されたが、少なくとも40年以上の昔の事である」とあるのを発見した。大正13年から40年前といえは明治13年(1880年)の事であるから今から78年以上前にギターが日本にはいって来た事丈は間違いない様である。

明治38年学習院輔仁会に、翌年東京美術学校(芸大美術部の前身)に比留間氏の指導によってマンドリンアンサンブルが出来たが、その頃ギターは独奏楽器としてではなくマンドリン合奏中の楽器として取扱われていた。そして独奏楽器として認識せられたのは明治44年イタリアの声楽家アドルフ・サルコリが来朝してからである。このテノールは帝劇で三浦環と組んで「カヴァレリア・ルスティカーナ」の一部分を上演してフアンをうならせ、引続き日本に定住して演奏会で唄い、教授所を開いて原信子、鉄能子等を教育したが、相当のギタリストで屢々ギター独奏曲を弾いたり、明治44年に出来た慶応マンドリンクラブのギターパ

ートに加わったり、自分でギターで伴奏を付けながら行ったりした。然しギター独奏会を開いた事はなかった。

が彼の独奏によってギターが独奏楽器として魅力ある事が分り、彼に師事する人が何人か現われた。彼の弟子関根文三氏が、大正4年6月音楽普及会（小松耕輔氏、大和田愛羅氏等によって作られた室内楽の定期演奏会）で日本人として始めて公衆の前でギター独奏をした。（但し独奏会としてではなく、他のプロの間に演奏したのである）

大正3年10月に日本人によるギター独奏会が始めて開かれた。尤もそれは1人のギタリストによる独奏会ではなく、オルケストラ・シンフォニカ・タケキ（当時の名はシンフォニア・マンドリーニ・オルケストラ）のギターパートの3人のメンバー、武井守成、村上二郎、高橋文夫のジョイント・リサイタルだったが散々な失敗に終わった。

昭和4年セゴヴィアが来て帝劇で5日の演奏会を開いた時日本のギタリストも一般音楽愛好家も始めてギター音楽とその演奏の真価を知り、ギター音楽の真の美に始めて目ざめた。そして今日の日本ギター界の発展の遠因であると同時に本当の原因になったといえる。

もしセゴヴィアの来演がなかったら日本のギター界は戦争迄もって低いレベルの中に眠り続けたかも知れない。然しセゴヴィアがその眠りを覚ましたといっても進歩はのろかった。ギターを教える立派な資格と能力のある教師がいなかったからである。ギタリストは教則本や文献によって手探りで勉強するより他になかった。

震災前後を最高潮とするマンドリン合奏団の増加はギタリストの増加を必要とした。それ等のギタリストは古参者の手引きによって増加した。そして古参者の中あるものは消えて行き後に残った熱心な研究家が少し宛進歩して行った。ギター演奏の難しさが急速の進歩を許さなかったからである。

こうして遅々としてではあるが経験を積んだ古参者が増えて来た。その間にあって武井氏が雑誌「マンドリン、ギター研究」で指導的な意見を述べ、沢口忠左衛門氏が雑誌「アルモニア」で色々な文献や意見を述べ又盛んに楽譜を輸入した事は推進力となった。

尤もセゴヴィア来朝前からギター独奏はマンドリン合奏演奏会の曲目の一部として行われていたのみならず、独奏会も展開かれていた。誰が最初に独奏会を開いたかは明かでないが私の知る限り、大正14年5月に池上富久一郎氏が横浜で開いたのが最も古く、それに続いたのは昭和元年北海道岩見沢町で独奏会を開いた露本辰治氏である。一時オルケストラ・シンフォニカ・タケキのメンバーだが後独立して演奏と作曲に派手な活動を見せて戦前逝った大河原義衛氏は昭和2年8月故郷の北海道旭川で独奏会を開いた後昭和3年7月と4年5月に日本青年館で独奏会を開いた。この3年7月の日本青年館の独奏会は日本最初の本格的なギター独奏会といっていゝだろう。

然し何と云っても我がギタリスト達に最も大きな刺激を与えたのはセゴヴィアの来朝だった。先ず小倉俊君が奮起して（？）盛んな演奏活動を始めた。横浜、広島、名古屋等にもギタリストのグループが出来てジョイントリサイタルをやり始めた。勿論東京にもグループが出来、独奏会を開く人々も少し宛増えて来た。そこへ戦争がやって来てギター界の展開は一時中断せられた。

然し終戦と同時に戦前以上の勢を以て展開が始まった。戦前の研究家で一家を為して演奏活動をすると同時に後弟子を取る人が増加した。その為新しいギタリストが著しく増えて来た。マンドリニストは増えるよりも減る傾向があったがギタリストは増えて来た。そこへ展

開に新しい刺激を与える新しい出来事が起った。小原安正君を委員長とする日本ギター連盟が昭和26年からギターコンクールを開始した事である。次いで関西でも九州でもコンクールが始められた。

仙台の高橋功君が沢口忠左衛門氏の志を継いで雑誌「アルモニア」を復刊して内容ある研究や論文を載せ、盛んに外国の作曲家やギタリストと連絡を取って欧米ス界の情況を紹介した事や小原君の主宰するギタルラ社が「ギタルラ」を、玖島隆明君のギターの友社が「ギターの友」を刊行したのも同様の刺激をギター界に与える役目を勤めている。日本ギター連盟と「アルモニア」がギター曲作曲コンクールを開いた事も一役勤めた。

昭和29年にアルジェンティンから名ギタリスト、ルイザ・アニーダが来てセゴヴィア来朝から24年目に老熟した演奏を聴かした計りでなく熱心なギタリスト達に演奏を指導した事は非常に有意義だった。日本のギタリスト達はセゴヴィアからは靈感を与えられたがアニーダからはもっと實際的な演奏法を教わり、セゴヴィア来朝の頃より遙に強い吸収力で直接的な知識を摂取したに違いない。

この様にして独奏会や御弟子の発表会が著しく増えた。私の知る限り最近毎年20回前後のギター演奏会が開かれている。これは戦前に見られなかった盛況で、この活気は戦後の新事態であると思う。

30年に小原君がスペイン政府の給費生としてマドリッドに留学し、2年間同市音楽院でサインス・デ・ラ・マサ教授のクラスに学んだ事や同君等とギターコンクール第一回の優勝者阿部保夫君がイタリアのシエナのアカデミア・キジアーナの夏期音楽学校でセゴヴィアとブジョールに学んだ事は戦前には想像も出来なかった事である。更にも一つ画期的な出来事はこの11月ベルリンで開かれる第20回国際ギタリスト会議に高橋功、小原安正、高嶺巖の3君が名指して招待された事である。この事は高橋君が日本のギター界の事を歐洲のギタリスト達に紹介した事と小原君がスペイン留学のついでに歐洲諸国を歩いて来た為に起った様であって日本のギタリストとギター界が歐洲でも認められた事を意味する。

戦後の新事態としても一つ付け加えなければならないのは石田一郎君が小倉俊君の為に、間宮芳生君が小原君の為に（ベルリンでの初演の為に）ギター協奏曲を書いた事である。今迄のギター曲は全部ギタリストによって書かれたもので小曲がかったが今度はギタリストでない作曲家が本格的な協奏曲をギターの為に書いたという事はこれ又戦前には考えられなかった事である。

さて以上の様な一連の戦後の新事実を見ると日本のギター界には新しい時代が来つゝある様な気がする。遅々として抄らなかつた日本ギター界の発展が大きな歩度を以て始められる可能性を持ち始めた様に思われる。も一つという我々はこれ等の新事実を踏み切り台として大きな飛躍をする為に大きな努力をしなければならない時期に到達したのではないだろうか。

それに付けても考えられるのは我がギター界全部の奮起である。趣味的なアマテアリズムを脱却し、ギター音楽史の世界にちじこまっている事なく、音楽というきな大きな世界の中に身を置いて、ギタリストやギター音楽愛好家という限られた社会丈ではなく、広く音楽家と音楽愛好家から認められ、それ等の人々を引き附ける丈の実力を獲得する為に精進す可きではないだろうか。前途は明るい。その希望を無駄にしないようにしようではないか。

私のお祝の言葉

私は自分が期待されたり責任を負うようなことから出来るだけ避けたいと思っているが、之と同じように人にも又期待したり責任を負わせるようなことはしたくない。之は永い間に色々な目に逢って辿りついた私の感慨で情ない程消極的であるが、しかしどうにもならないものなのである。

今回高橋氏の渡欧に就いては本誌前号で各界の方々が祝辞を寄せられ斯楽に携わる者の一員として当然私もお祝いの言葉を述べなければならないのをついに書き渋って了った。というのは成果を期待すると言っては氏に重荷を負わせるような気がして私には書けないのである。氏の渡欧が日本の斯界にとって最も時と人を得ていることは私が言うまでもないが実質的に最も喜んでいるのは私ではないかと言う気さえするのである。最初にこの話をきいた時には私も嬉しくて慾ばってあれもこれも調べて頂きたいもの、見て来て頂きたいもの、色々書出してみたが今はもう「気楽に行って来て頂きたい」と思うだけである。かの南極観測隊が出かけるに就いても本質的な仕事の意味も何も関心しない者までがよってたかって大騒ぎして、何でもない派生的なことを取上げて色々な取沙汰をする。世の中は斯うしたものなのである。

演奏にしても作曲にしても日本の斯楽などと余力まないで気楽にやってきて下さい、そしてこの上とも見聞を拡められて私達を喜ばせて下さい。

宣 伝

生存競争がこう激しくなると機を捉えては適当に自己を宣伝することはどうも必要であるらしい。この頃ではそういうことを公言して憚らない人も出て来ている。この人がと思うような人が意外なところでやっぱりやっているのを見ると之は持つのが当り前でやらないのがバカということになる。実際我々の日用品にしても一応名の通っているものは、外に如何に実質的によいものがあるかも知らないのだから手の出しようがない。つまり知らしめることも大切であるが、知らしめることばかりに力を入れて実質が相変らずでは困る。知らしめることが案外に効果を取る期間は短いもので世間はそう甘いものではない。そういう第一義的なものから遠いものに氣をとられて大切な時期を失うようでは健全な発展は望まれない。演奏にしても作曲にしても本邦の斯界は何か一本大きな釘が抜けている感じが否めないと言っては言い過ぎであろうか。

性 格

私は月々放送管絃楽団の指揮を数回やっているが、同じ奏者に対して同じ注意を再三与えることは如何にもその奏者を侮辱したようで私には堪えられない。東京から著名な指揮者が来た時は徹底的に之をやるので結果はよいが、指揮者はやはりそれでなければいけない。従って私はそういう任でないということになる。然し私自身は同じ過ちを二度犯すようなことがあってはならないと常に心懸けているつもりである。私は又私の作品なり演奏を人にきいて貰いたいと思うことがなくなってしまった。それは自信があるからでもないし、自信が無い

からでもない。従って演奏会でも放送でもいついかにやると前もって知人に知らせることはない。然し仕事を投げやりにやっているわけではなく、現在の力一杯で真面目にはやっているのである。たまたま自分の作品がどこかのプログラムに出ることがあっても何か人事のような気がしてさして関心が持てない。まして自作を練習生に与える等は懇望でもされない限り私から申出ることはない。かつての作曲コンクールでも今回の高橋氏渡欧後の日独交歓演奏曲でも高橋氏の厚情拒み難くというのが実際の私の心状で、私はいつの間にか斯ういう人間になって了った。

真 意

最近地方では知られた人の追悼会が盛大に行われた。故人と同じような仕事をしていた人が其の方面の人を代表して追悼文を読み上げた。並いる人達はその名文にホロツとして改めて故人を追憶し、更に之を読んだ人に感謝を惜しまなかった。然し私はその樂屋を知っているのである。すべては作られたものなのである。才智で纏めあげられたものと真意の溢れたものゝ区別がつかずに読んだ人もきいた人も満足して帰ってゆく。私はこういう世界に住まなければならないのが全く淋しい。

顔

五十過ぎての顔にはその人その人に責任があるそうであるが、私のは顔中の諸道具が各我を張りすぎていて全然まとまりがないそうである。この頃ではそんな話になっても平気で「話題をかえましょう」と言えるようになったが子供の頃父親に絵のたしなみがあってよく写生され、その都度「どうして自分だけこんな顔に描かれなければならないのか」と恨めしく思った。誰です？さもありませんという顔をするのは。二十代の頃たった一度眼科医の所へ行ったことがあるが、つくづく私の顔をながめて「これは実に珍らしい、君、電信柱なんか二本に見えて困りはしないか」というのである。之にはこちらが驚いてわけをきいてみると私の両眼は左右どちらかにひどく傾いているそうである。三ツ目小僧じゃあるまいし以来世の中の眼医者は全部きらいになって了った（高橋氏は別）戦争前よく演奏に出かけたが下関附近や列車がお召列車とすれ違うような時には必ずといってよいほど特高課の刑事につかまった。と言ってもおもむろに名刺を出されて懇ろにスイカされるのである。行先、用件を尋ねられた上お荷物拝見とくるのであるが出てくるのは楽譜みたいなものばかりでトンと当てが外れるらしい。どうも共産党の闘士に見誤られるのでわけをきいてみたら「どうも眼つきがネエ」と言われた。そのくせ私はスリにはよくやられている。私にして言わしむれば特高課の刑事よりはスリの方が眼が高いと言わなければならない。

師 匠 心 得

永年師匠だの先生だのやっているものと門弟生徒との間に知識経験の開きが出来て、敢えて勉強しなくても、同じようなことを小出しにしていればつとまらんことはないから、こんな楽な稼業はないと言える。後輩ばかりに囲まれてその上にあぐらをかいているとついには何でも知っているような錯覚に陥り起居、動作、言葉つきまで人にものを教えるような習性が身にしみついて了って、しかも本人は一向に気付いていないというのはたから見てどうにも見苦しい。一と口に先生と言ってもピンからキリまであって、底知れぬ造詣のある人から、
(27頁へつづく)

アルメイダのギター教本抄

Guitar Tutor by L. Almeida

高 橋 功

ギターの歴史

先ずこれから学ぼうとする楽器ギターについて簡単な概説を試みて、前奏曲としよう。

ギター guitar (英、米) は外国では Violao (ポルトガル語) guitare (フランス語) giutarre (スペイン語) chitarra (イタリア語) gitarre (ドイツ語) と呼ばれている。それは古代リュートからわかれた楽器である。勿論現代一般に使用されているリュート属ではない。古代リュートの起原については、太古のことで知る由もないが、昔話によると、絃楽器は矢が弓をはなれるときの音から工夫したものであるという。

エジプト文明は世界最古のものと言われているが、当時の記録に絃楽器がすでに見えている。西暦紀元前三、四千年前の第四王朝期の葬式を描いた壁画にハーブと古代リュートが見られる。この古代リュートは Nabla と呼ばれたもので、形は現代のマンドリンに似ている。ふくらみのある共鳴胴、フレットのついた柄、調弦用のペッグ、表面板のロゼット Rosette, そして一乃至三弦を張ったものであった。

この古代リュートはエジプトからアラビアに伝わり、アラビアで目ざましい発達をとげた。アラビア人はこの楽器を el aud と呼んだ。それはアラビアからペルシア、インドに伝わったが、インドでは magoudi と呼ばれた。ギリシャ人は三弦のリュートを用いたがリュートよりもむしろリラやチターを好んだ。ローマ人は弦楽器よりも管楽器を好んだし、リュートは殆ど用いなかった。

その後アラビア人はこの楽器を南イタリアとスペインに持ち込んだ。そして間もなく全ヨーロッパに広まり、十四世紀頃には現代のピアノほどに一般的な楽器となった。十六世紀頃には11弦のリュートもあったが、高音弦は Chanterelle といって主にメロディを奏で、他は複弦で和音を附する役目をつとめた。小型のリュートは、丁度マンドリンに似てふくらんだ共鳴胴を持ち、キテルナ quiterna 又はキテルナ Chiterna とよばれたが、この語源から guitarra, guitar という言葉が出たのである。今日のように裏板が平面になったのは十七世紀以後のことである。

アメリカの原住民やアフリカの黒人達は色々な管楽器や打楽器を持っていたが、弦楽器は殆ど持たなかった。スペインギターを他の楽器と共にアメリカに持ち込んだのはヨーロッパの人達であった。

現代のギターの各部名称 (省略)

調 絃 法 (省略)

コンサートギター

過去 200 年の間にコンサートギター (又はスペインギター) はテクニックの上で著しい発達をとげた。Beethoven の友人の一人であった Ferdinando Sor があらわれる前は、ギターは一般に伴奏の役目を果していた。勿論それ以前 J. S. Bach から Robert de Visee, Luis Milan, John Dowland (後者はリュート伴奏の歌曲もたくさん作ったが) に至る大作曲家

達はギターの前身たるリュートのためにすぐれた独奏曲をたくさん作っている。ところがこれ以上両手を駆使する方向を誰も考え出さなかったのである。

こうした夜についてギターの揺籃の地スペインにギターを独奏楽器として扱うことを考え出した熱心な大家達が輩出して、夜が明けはじめた。この開花期にようやくギターは真の姿をあらわした。そうして数々のすぐれた独奏曲が制作され、又大曲名曲の編曲がさかんに行われて、ギターの音楽は次第に豊かになってきた。

この時代のコンサートギターの先駆者は **Ferdinando Sor** (ギターの **Beethoven** とも呼ばれる) と **Dionisio Aguado** の二人であった。この二人の先駆者は当時ならぶ者なきすぐれた演奏家で、ギターの高度なテクニックを最大限に展開した。この二人と時を同じうして **Matteo Carcassi**, **Mauro Giuliani**, **Julian Arcas**, **Ferdinand Carulli** などのすぐれた演奏家が、何れ劣らぬ技量を示した。この外 **Nicolo Paganini** の名声が高く、上記の大家達に劣らずギターをよくし、彼の本領たるヴァイオリンへの貢献に劣らぬ献身をギターに示した。彼 **Paganini** のギターの作曲もさることながら、演奏のすばらしさも格別であった。

Sor と **Aguado** の残したところを成しとげたのは巨匠 **Francisco Tarrega** であった。**Tarrega** は右手第三指を、第一、第二指と同じように使う奏法を考え出して一派をなした。そして従来右手小指はギターの共鳴板上に接着させたものだったが、これをはなすことにしたのも **Tarrega** だった。親指を重用するようになったのも **Tarrega** がはじめたのであった。コンサートギターのテクニックの進歩に於て、**Sor**, **Aguado**, **Tarrega** の三人は明らかに黄金時代を画する存在であった。

Tarrega (1909年歿) が火をともした松明は現在 **Andres Segovia** にうけつがれている。彼 **Segovia** はギターを一般音楽に優位を占めさせ、**Tarrega** その他の先人達が夢に描いた世界をギターに実現したのである。**Segovia** は凡ゆるテクニックを克服して新しい頂点を画し、不滅の音楽を創造し、ギターに威厳を与え、ギターが珍重される時期を招いたのである。彼が独奏楽器としてのギターに与えた数々のすぐれた編曲は、全く **Homer** (ギリシア詩人) の文業に匹敵するものである。

ギターのテクニックは更に躍進し、かつては禁止されていた右手小指の使用も、今ではすぐれたギター奏者達がこれを活用し、結局右手の五指を全部使うのが現在の奏法となっている。この右手小指の使用によって六弦にわたるアルペジオが輝やかしい効果を上げ得るのである。小指を使用する以外にはきれいなアルペジオが望めないような場合が少くない。

芸術の歴史も科学の歴史も、おしなべて人間の歴史自体が、色々なつまづきや失敗のくりかえしの上に築き上げられているのである。ギターの歴史も例外ではない。現在のギター並びにギターのテクニックが、そのまゝ次の時代にふみとどまっているとは、誰も断言出来ないわけである。

この教本の練習曲の中には、広いそして進んだ現代のハーモニーを理解するためにしばしばモダンな音楽用語を用いた。これは百年も前の練習曲を依然として踏襲している教本と類を異にしているところである。

練習者はまず各絃上の名フレットの音符をしっかりとのみこまねばならない。音符とそれが示すフレットの位置を正確に速かに読みとることが最初にやるべき一番大事なレッスンである。それには実物大の図面を作って指板に張りつけて練習することもあり得る。

現代のギターは高い三弦はナイロンを用いているが、南アメリカでは末だにガット弦を用いている所もある。低い三弦はナイロンを芯としてこれに細い銅又は銀線をまきつけたものである。たまに、第3弦にこの巻き線を用いている人もあるようである。 (未完)

作曲コンクール審査発表

過般アルモニア復刊5周年の記念事業の一として計画しましたギター独奏曲の作曲コンクールは予定通り6月末日を以てメ切りまして7名8曲の応募を得ました。

中野二郎、小船幸次郎両先生の審査の結果入選該当の作品を見出すことが出来ず、選外佳作も取上げないことに決定しました。

予期の成果を上げることが出来なかったことは遺憾なことです、将来のためこゝに審査員の短評をお願いして掲載することにしました。作曲上の勉強の一助にもなれば幸と存ずる次第です。

(高橋)

審査を終えて

中 野 二 郎

この程度で受賞は甘すぎます。強いてあげれば佳作（まけて）の程度もあります。けれども二百年も前にもうギター曲では立派な曲があるのですから、小さくともう少ししっかりしたところを見せて貰いたいものです。模倣のようなものでもいゝからジャンとしたものが欲しいです。小手先や小器用で作曲する人がギターには多いのですから。

短評（順序不同）を試みましょう。

日 マ シ サ

中 林 淳 真 作 曲

和音をひねくらず、素直に好ましい情緒が漂うところはこの作者の持味らしいが構成と記譜上の曖昧さを整理する必要がある。長調から短調に移る時三拍分の空白は長すぎるし、この短調のメロディの最初の音は H 音だけか H と A にして次を明確に主和絃として初めた方がよい。音の構成が単純なれば一層斯ういう音の処理、扱い方は慎重にしなければいけない。最後のダ・カーボの時の経過音は普通 Cis, Dis とすべきところである。記譜上の問題ではソルあたりの記譜の仕方に倣った方がよい。単なるアルペジオかメロディとして残す音があるのかハッキリしない。ソルは上中下三段に音を書きわけているので非常にわかりよい。

遠いギタ一

同

やはり記譜上の誤りと見られるところが沢山あって了解し難い。ハパネラとあるが



のような所が随所にあり更に低音が曖昧な場所を書いてあるのでわからない。

ハ バ ネ ラ

加 藤 和 明 作曲

自分の作品を人に見て貰うのに自分の心覚えに書いておくような殴り書きは困る。インキをあちこちに落したり、抹殺したり、一小節を二段にしたり。三十二小節のうち四小節が属和絃であとは全部主和絃。作者のオリジナリティは何処かにないかと思ったが片鱗も見出せない。

日 暮 れ ワルツ

出 口 実 作曲

町寧にきれいに書いてあるので助かる。メロディだけを取り出すと一応素直に書かれているが低音の動きがいけない。苦心したところらしいが基礎的な理論の裏づけがなくして音を当てはめてゆくとこんなことになってう。

三 陸 の 村 に て

石 井 金 吾 作曲

斯ういう日本の民謡調えの和声付けは各人各様に抜われているのでそのことは問わないにしても屢々テムポを変える必然性に乏しく納得出来ない。素材は悪くないが、音楽的に発展させるとかギター曲としての面白さを追究した作品であって欲しい。

幻想曲とスケルツォ

森 本 寿 恵 春 作曲

譜が汚い。実に汚く書いてある。元来審査に当ってこんなことを書かなければならないことが情ない。他の世界であったなら文句なしにそれだけで没である。書いたり消したり書き足したり。ベートーベンの例にみるような我々凡人には見にくいものも稀にはあるが、古来の大家の自筆譜が如何に町寧に美しく書かれているか。余事であるが私の親しかった大学教授（故人）はハガキ一本書くのに実に町寧な楷書でくれるのできいてみたら「僕は字が下手だから町寧にわかり易く書くことにしている」と言っていた。其の人は貴重な仕事を沢山残した人である。楽譜は人に自分のものをわかって貰う手段である。[ものさえよければいいではないか]は成程それに違いないが、凡てのことに斯ういう態度でのぞまれば私は審査を忌避したい。曲の内容、構成、意図共に私には了解し難い。

小 変 奏 曲

三 波 栄 沙 子 作曲

主題と五ツの変奏曲である。主題と第一変奏までが無難であと段々つまらなくなつて了った。各変奏がもう少し性格的に変つて来ないと面白くならないし、一つの手段を見出しても音楽的な処理にもう一つの工夫がないと盛り上らない。イ、ジイゴーイングになっては意味がないから一つ一つを真剣にやられるとよいと思う。

夜 の 渚

田 村 敏 雄 作曲

抒情的な二短調のトレモロの曲。メロディの発展が常套的に収まってうるので和声的の変化が与えられず曲の中に引張り込む力、魅力に乏しい。二、三和音の設定で同感し難いところがあるがしかし無難な作と言えよう。長調の現れ方がやゝ拙い。

本格的作品がない

小 船 幸 次 郎

ギターの演奏コンクールは戦後ギタラ社主催のものが何回か催され、コンクールではないがギターの友社のものもあって可成り活潑である。これがギター界を刺激していることは多大で、多くの有能な若いギターリストがこゝから出ている。ところがギター曲の作曲に対するコンクールの方は極めて低調であった為、この方面の新人が現われなかった。これはコンクールのなかった為ばかりではないかも知れないが、刺激のなかったことは確かである。今度アルモニア誌が主催して作曲のコンクールが催されたことは極めて時機を得ていた。集った曲は八曲である。数としては私は少ないとは思わない。しかし内容となると低調だと言わざるを得ない。もっとも先輩達がさっぱり作品を発表しないし、たまにあっても立派なものがないのでは、後進が現われないのも無理はない。それ故に今回の成績に失望せず、今後演奏同様継続して作曲のコンクールが催されることを切望する。

八曲の中に受賞に値する作品がないと言うことは中野氏も私も一致した意見である。どの曲も作曲技巧が低く、構造が甘い。見ごたえのある曲が一つもなかった。コンクールと言うのは先ず作曲家の作曲技巧の巧拙を見るのであるから、作曲家は本格的なものを書かなければいけない。例へばソナタであるとか、フーガであるとか、組曲であるとか言った類のものである。変奏曲なども結構であろう。作曲家が本格的な作曲技術を充分現わすことが出来る形式の曲と言ったら先ず右の様なものであろう。ハバネラやワルツ、又はロマンスでも結構であるが、例へばハバネラならハバネラの舞曲形式又はリズム、メロディーを借りて自分の心境とか思想を現出するものでなくてはならない。本当のハバネラやワルツになってしまつては娯楽音楽であつて芸術ではない。八曲の中に右に挙げた形式の中の変奏曲が一曲あつた。三波菜沙子さんの「小変奏曲」である。十六小節の主題と、五つの変奏から成っている。しかしさうか本格的とは言い難い初歩の変奏曲である。ギターの第一ポジション以外の音は一度も現われなし、曲の途中に一つの転調もない。演奏技巧の上でも初歩に属する曲である。しかし変奏曲はやがて組曲にもソナタにも通ずる道であるから、将来を期してこの道を進むことを望む。

作曲のコンクールと言うのは作曲者の能力を示さなければいけないから、作品の中に、旋律を展開する技術であるとか、転調の手腕であるとか、対位法上の技術、カノンやフーガの技巧の片鱗を示すなどと言うことを行わなくてはいけない。審査員は作品中に用いられているそう言う様な技巧を通じて、作曲家の能力と程度を知ることが出来るのである。例へば三波さんの小変奏曲の中に転調が一つも用いられていないということから、この作曲者は和声学の勉強はまだ初歩だなど審査員は考えてしまうのである。この場合曲がいくら素直に感じよく書けていても駄目なのである。例へば出口実さんの「日暮れ」(ワルツ)と言う作品は、三拍子であるからワルツと言うのかも知れないけれど本当のワルツにはなっていない。その意味からはこの曲は駄目のだけど、旋律の構成にカノンを用いているので、曲は幼稚だがこの作者は対位法を勉強しているか興味を持っているなど言うことが解る。従つて現在は幼稚だが対位法と言う作曲の基礎的勉強をしているなら将来伸びるかも知れないと言う興味をそゝられる。

田村敏雄さんの「夜の渚」はトレモロ奏法の曲で一応のまとまりを持っており、ギターの

使い方も上手であるが、短調が長調に変るところが拙劣で、和声的処理を知らないのではないかと疑われる。そうなると一応よくまとまっているこの曲も、単なるアルハンブラの想出の模倣に見えてくる。『ハバネラ』が二曲あって一曲は加藤和明さん、他は中林淳真さんのものだが、加藤君のものはよくまとまっていたが、先にも述べた通り、本物のハバネラ舞曲になってしまっているところに通俗性の方が強過ぎてしまっていて、一般の作曲コンクールでは取上げかねるものだ。これがハバネラ曲の募集であつたら結構なのである。中林さんのはその意味ではハバネラ形式を借りた小曲で、『速いギター』と言うのはっきり意味のつかみかねる題名がついているから舞曲でない何かを訴えているのであろうけれど、初めから三小節目と五小節目が八分音符にして六つあって、四分の二拍子にはなりかねる。そうかと言って裝飾音符が入っているとすると八分音符で五つになるし、どうにも理解しにくい。後半に同じことが又現われるから写譜の誤りでもなさそうだ。中林氏はギター社のギター演奏コンクールに入賞した人だから譜の書き方を知らぬわけもなし、このハバネラはどう言う様に演奏されるのか一度中林さんに聞いてみたいと思う。中林氏にはもう一曲『ロマンサ』と言う応募曲がある。私より先に応募作品を審査なさった中野先生から、応募楽譜と共に感想を寄せられた中に、入賞作品はないと思うが若し佳作をとれば田村氏の『夜の渚』と中林氏の『ロマンサ』でしようとして書いてこられたので、いさゝか期待して入念に幾度も見たが、まあまあと言ったところで、特に佳作に取りあげたい程他より良いとも思えなかった。後半半短調になってからはまあよくまとまっている。旋律の置き場所などはギターとして最も鳴りの良く、しかも奏き良い場所になっているところ等はギターをよく知っていると思うけれど、主三和音だけで、転調一つなくしたがってきれいだけと深味が出ない。

どうも解けの分らないのは前半で、旋律の流れが幾度奏いても解せない。作者のこり過ぎの為と取るには作曲技術の幼稚が目につく。森本寿恵春さんの応募作品に『幻奏曲とスケルツォ』と言うのがあった。題名としてはコンクール等の応募作品向きで、ソナタ等の次に気持を誘われる題名である。しかし三波さんの小変奏曲と同様題名だけは良かったのだが、内容は粗末で、和音に対する知識など入曲中最も低いものではないかと思う。曲の長さの点では八曲中最も長いもので、貧しい作曲上の智識の中からあれだけ長いものを作り出すのは、一度に作ったものか、二度に作ったものか知らないけれど、——恐らく別々に作られたものと思うけれど——大変だったと思う。長いものが作れると言うことは短いものきり作れないよりも良いことなのだから、確り作曲理論を学んでから書く様にしてもらいたい。石井金吾さんの『三陸の村にて』は他の七曲がいずれも西洋の旋律に西洋の和音をつけた西洋流の作品であるのに、石井さんの曲は日本風の旋律に、やゝ日本風な考えを盛った和音をつけたやゝ日本流の作品である。作曲技術も八曲の中では最も高いのではないかと私は思う。中間部の後半で、単音で旋律を奏く前後がやゝもたついているが、前部と後部はよくまとまっている。中野先生からの手紙の終りに『——汚く書いてあるのはそれだけでイヤです。』と書いてあったが全くその通りで、八曲の中で最もキレイに書いてあるのはこの石井さんの、『三陸の村にて』であるから、キレイに書いてあるだけでも汚いものよりは良いわけだ。

これで大体応募曲八曲の批評とも感情ともつかぬものを終ったわけだが、まともに論評するに耐える曲のなかったことは残念である。

中野先生と私は、審査に当って全く事前の打合せなく別々に作品を見た上で、二人とも自分だけの考えを述べたので、二人の言うことに多少の喰違ひはあることゝ思う。しかし大きな意見の違ひは起り様がないので、二人揃って作品を見ながら審査に当れば、必ず一致した批評になっていると思う。

レコード

9、10月もギター愛好家にとって楽しい贈りものがたくさん出そろっている。先ず Decca が「セゴヴィアの芸術」(JDL-8001)と同時にゴメスの「ギターリサイタル」(JDL-6069)を出した。共に 30cmLp で、後者は数年前の吹込みです。Ep で一部発売されたと記憶している。Victor がやはり 30cmLp でカルロス・モントヤの「フラメンコ・ギター」を出してフラメンコファンをよろこばせている。モントヤの Lp はアメリカでは早くから何枚も売出していたのに、発売元の関係で、今まで日本盤が出なかったのである。歌や、カステネットや手拍子や靴音を加えた絢爛たるもの。

今秋来朝が決定した清純可憐な少女シャンソン歌手ニコル・ルヴィエのロンドン盤 25 cmLp (LLF-3004) がモーリス・シュバリエの推薦の言葉入りで出た。ギター歌手として話題を提供することになるう。

この1ヶ月半 NHK・TV を注意して見たり、きいたりしたが、ついぞギター独奏にはありつかなかった。筆者の見おとしだったかも知れない。

ところでその間、私達は勤評反対の小、中学校の先生達のあさましい(敢て言わせてもらへば)乱闘ぶりを、いやというほど見せてもらった。という HK ではそれできゝ目があったというかも知れない。しかし一方あの位のこととはしていゝのかも知れない。それなら俺達もあれをまねてやろう、などという者も出て来ないとは限らない。こうなる」と HK はどういうだろう。勿論出入の先生の話ではあゝいう乱闘の先頭に立っているのは先生達ではなくて総評とか全学連とか何々労組の応援なのだという。それがほんとうだとすると先生以外の人達が先頭に立って勤評反対をしていることになる。馬鹿げたことである。ギターの独奏でも静かにきかせて下さい。NK・TV にお願ひ。

テレビ

9月14日 NHK 第2音楽クラブで、第20回国際ギター音

楽家会議がテーマに取上げられた。秋山邦晴のよく調べ上げられた従って用意のゆきとどいた司会ぶりには感心した。小西誠一との対談の形で話がすゝめられ、これに小原安正、高嶺巖がゲストとして加った。小原の話と実演に精彩が欠けていたのは病後の衰弱のせいだったと考えよう。それに比べると高嶺の話と実演はなかなかみごとだった。とに角音楽クラブにギターが35分にわたって取上げられたのは異例のことと言っている。NHK の企画に感謝し、且つ喝采をおくる。

これより先9月10日 HK 第1の全国中継に高嶺の独奏が予告され、久しぶりのギターだったので大いに期待していたのに、勤評騒動の放送が何かに時間をとられてしまって、放送中止となったのはいかにも残念。勤評騒動が私達の世界にまで害を及ぼすとなつては、勤評反対に反対せざるを得ない。

時評

(敬称略)

フランス映画「河は呼んでいる」が、ギターだけで押し通してい、その点で「禁じられた遊び」に次ぐも

のという評判が高い。筆者はまだこの映画をみていないのだが、エビック盤のサウンド・トラック (NS-4) できく限り、音楽も演奏も到底「禁じられた遊び」に及ばないと思われる。テーマは単純で愛すべきものだが、二重奏の部分もやゝ手のこんだ変奏曲の部分も、上々とはいゝ難い。むしろ「リラの門」に於けるブラッサンスの詩情に及ぶまい。

日本映画「無法松の一生」はベニスの国際映画祭でグラン・プリを獲得して、「羅生門」につぐ光榮に浴したが、ギターを主とした映画音楽で賞を得られるような企画はないものだろうか。イミテーションやカリものではないけな。オリジナルな作品で立ち向うような作曲家演奏家の奮起を期待する次第である。

ラジオ

映画



Jacq Witte

オランダ Rotterdam 在住の非常に熱心なギタリスト。まだリサイタルを持つたことをきかないが、ギター音楽祭などには出演している。数年来の文通で、オランダのギター曲、マンドリン合奏曲など集めて送ってもらった。これも5年ほど前のことだが、球根を一袋送ってきた。Snow drops で、それから毎年小さな白い花をつけ、そのたびに友情を新たにしている。

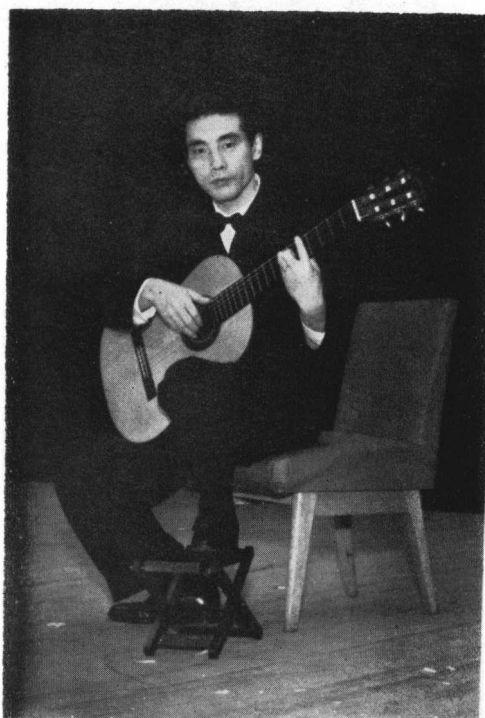
自作や編曲もたびたび送ってきた。本誌巻末に紹介した Pierrette は組曲「遊んでいる三人の女の子」Drie Spelende Meisjes の最初の小品で、Lisette, Anja とつゞくのである。若い初歩のギタリストに弾いていたゞきたい小品である。

特製手工ギター

第20回国際ギター音楽会議展示会出品

Minoru Kano

楽器製作家 加納 実
名古屋市昭和区長戸町2の28



小 原 安 正

大正3.4.1 北海道に生る

早 大 中 退

小倉俊に師事

小原音楽研究所主宰

「ギター」主筆

「ギターの知識」作曲集など多数あり

昭和30. スペイン留学、「キシアーナ」に学ぶ

演奏会用手工ギター

(標準型、小型、テルツギター等各種)

第20回国際ギター音楽会議展示会出品

Masaru Kono

河 野 賢

東京都豊島区千早町1の4

電 話 (95) 5 5 7 4 番



高 嶺 巖

昭和4.1.8 東京に生る

昭和25 慶大文学部卒業

溝淵浩五郎に就きギターを学ぶ

村田武雄に師事

昭和26. 秋第1 回リタイトル

高級手工ギター

第20回 国際ギター音楽会議展示会出品

ギター・ヴァイオリン製作家

Sakazo Nakade

中 出 阪 蔵

東京都中野区城山町24

次代をになう若いギタリスト



小原 安正氏令嬢
小原 聖子 (15才)



(医博荷見源藏氏令嬢)
荷見トリオ
三三三
十八七
子子子
131517 (中林淳真門下)
オオオ



佐々木政夫氏の令息令嬢
右より
忠ま紅政の令息令嬢
ゆまゆ子子嗣
15181216
オオオオ

間宮芳生氏のギターコンチェルト

小 原 安 正

音楽の発展の尺度は『創作』の質と量によって決められる。

スペインのギターの高さと言うものは、ソル、アグアド、タルレガを主流とする創作とそれに伴う演奏とギター製作、優れた聴衆によるそれらの選択によって支えられている。日本の現代、最も遅れているのは作曲活動であることは否めない。しかし最近では戦前と質を異にする現代音楽の作曲家が増加しているし、その作品群も成長して来た。

ギターの方では作曲活動が微々たるものである事は確かなことである。数人の良心的な人たちが骨身を削って苦しんでいるのは余り知られていないがこれは貴重なものである。

作品と言うものは演奏家や愛好者が培養しなくては出来ないものなのであって、その為に私たちが忍耐と親切を以て作曲家諸君をはげまして来たかと言えば、それは一部の人を除いてほとんど為されていない。

数年前から日本ギター作曲連盟を中心として創作運動を一本化し努力を傾け、数回にわたって注目すべき作品を生んで来た。

こうした空気の中で今度、間宮芳生氏がギターコンチェルトを完成してくれたのは、ただ日本のギター界ばかりでなく、世界の喜びであり、これはギタリストだけに限らない歴史的な発展であり寄与である。

作者については詳しく述べるまでもなく現代の日本で非常に高く評価されている人である。氏の音楽は勿論新しいものだが、極めて流麗で言いたいことを全部尽している。

ギターの技術については勿論知らないが、それがかえって大胆な手法となって未知の分野を私たちに見せてくれている。

ギターを書ける可能性のある作曲家は多勢いるから、その人たちに音楽的な意欲を起させる私たちの活動が、今最も必要であろう。

ギタリストである作曲家諸君の奮起も大いに期待したい。

第13回芸術祭参加作品



「ギター・マンドリンによる日本の旋律 (武井守成作品集)」

日本コロムビア邦楽 12月発売 (25 cm LP AL-118)

- A 面 マンドリンオーケストラ (オルケストラ・シンクオニカ・タケキ演奏)
指揮 ガエタノ・コメリ (副指揮 小林恵吾)
- B 面 1. そよ風 2. 踊る小花 3. 豊年 4. 雨とコスモス 5. 初秋の唄
独奏 (ギター伊藤翁介、小倉俊、小原安正、ゴンサレス、
マンドリン比留間絹子)
1. 軒訪るゝ秋雨 2. 落葉の精 3. 柴 垣 4. 行く春
5. 水に落ちた蝶 6. 破れたガラス戸 7. 翳 (かげ)

※ ※ ※
アルモニアに直接申込まれた方には一割引 (900円送料共)
でおとけます。10月末日までに申込んで下さい。

私が前に心配した通り、外務省の一部では国際ギター音楽家会議などというあまりきいたこともない集会に、遙々ベルリンまでも3名も派遣する価値が果してあるのかどうか問題になったらしい。日本代表の参加要請は今年がはじめてだったがそれはすでに1913年以降、戦争などで中止したこともあったが、すでに20回も開催された歴史を持っているのである。ところで3名を予定して主催者側ではすでにプログラムを組んでしまっているのである。そうしているうちに8月末小原君が急性肝炎に黄疸を併発して入院してしまった。私について高嶺君が渡航申請をしたが、小原君はその手続をしない。3名分出揃うまで保留というのでなかなか審議会で通してくれない。9月に入って、Behrend から何日に到着するか報らせてほしいという手紙が来たので私は気が気でない。小原君に早く手続をとるように連絡したら、間違いなく通してくれますヨ、役人なんてそんなもんですヨ、という具合で、案外落ちつき払っている。勿論小原君は渡航が経験済みだからそうしていられるのであろう。私は世界音楽評議会国内委員会に助言を求める外に道がないと思って、堀内敬三、箕作秋吉、小西誠一などの諸氏に泣言を申し上げたりした。一方、大蔵省方面を打診してみたら、外務省さえOKなら異議はないということなので、そちらから救援の手をさしのべてもらって、どうやら3名揃って派遣可能という連絡を受けとったのが10月1日。

今回の3名派遣は主催者側からの要請なので、日本側で選んだのではなかった。そんな関係もあって、所謂日本側の連盟も協会も我不関焉をきめこんで、何の支持も協力も得られなかった。私にしてみれば、資金カンパなどで縛られるより、個人の資格で自由に振舞える方がむしろ気らくでいゝので連盟や協会にどうしてもらいたいのこうしてほしいのとは初めから考えていなかった。

しかし強力な組織があって、事務一切をそこでやってくれて、代表は講演だの演奏だのだけをやってそれでいゝのなら、そんな組織を持ちたいとは思わないでもなかった。そしてそのような強力な組織がわが国ギター界でも作れるものなら作りたい作ってほしいとも考えた。それが代表を選びそれが代表を送るという方法が望ましいからである。

こんな気苦労があってやっと渡欧が決定した。これから一ヶ月しか残す時がないのである。私は開会第1日にアテネの Ekmetzoglou 教授と二重奏をやらねばならない。二重奏は相手が必要、しかもその相手の技量や気心がわからないのであるから不安である。第8日には「日本のギター音楽」と題する30分間のドイツ語による講演を行い、更に小原、高嶺君と共にギター独奏を行わねばならない。これは凡て邦人作品で、無理な曲でないから何とかなる。そして私は更に最終日11月15日に「さようなら演奏会」で数曲演奏しなくてはならない。これが会議に於ける私のステージである。

その間私は Willi Sommer の率いるベルリシマンドリンオーケストラと数回の練習を行い、会議後日独交歓マンドリン演奏会の指揮台に立つことになっている。このオーケストラは目下ベルギーの万国博覧会のアトラクションに出かけていて、日時はまだ決定していない。邦人作品として武井守成、中野二郎、服部正外数氏のマヌスクリプトがすでに先方にとけ

られている。

私と高嶺君の身元引受人は元西ベルリン大学教授で現在製薬会社 Schörling の研究所長 Prof. Med. Karl Junkmann である。ユンクマン教授の御配慮で、ベルリン滞在中に医薬学方面の施設や研究を見学させてもらうことになっている。私は10月23日羽田発で24日にはベルリンに到着するし、閉会后日独交歓マンドリン演奏会まで滞在することになるから約4週間ベルリンに居るわけである。その間ベルリンを、そしてドイツを正視したいと思っている。

小原君はベルリンから東欧諸国を経てソ連に演奏旅行をするそうで、その活動には驚嘆するばかりである。私は高嶺君と共に南下してウィーンに向う。チェコを通るのが近道だし、ブラグ音楽学校の Prof. Stepan Urban とは連絡済みなのだが、鉄のカーテンに入るのには外務次官の許可がなければならぬので、これは難かしく、実現出来そうもない。ウィーンでは中学時代からの親しい学友である古内大使を訪ね、Prof. Jakob Ortner に高嶺君の受講について相談し、老令でそれに堪えないとすれば Prof. Luise Walker か Prof. Karl Scheit に入門するように取りはからいたいと考えている。ウィーンではベートーベンの史蹟などを訪ねたいし、ザルツブルグではモーツァルト博物館などをよく見てきたい。フランクフルトでは勿論ゲーテ博物館でいろいろ調べたいことがあるし、叔父志賀潔が Prof. Paul Ehrlich と共にした化学療法の最初の発見をなした研究所があるのだし、そこの長 H. Helsencher と連絡づみだから、そこで数日滞在することになる。それからフランスに入るわけだが、ギュンズバッハで Dr. Albert Schweitzer の秘書 Madam Emmy Martin が待ち合せているから、早速アフリカに渡る準備にとりかゝることになる。フランスから先の旅券はシュワイツェル博士が手続をとって下さることになっている。そしておそくも年内にはフーコー号に乗ってボルドーを出帆することになると思う。

今年度奨学金による Accademia Chigiana の受講が実現の運びにならなかったのはいかにも残念なことだった。しかし延期を申出たところアカデミアの事務長でシエナ大学の Prof. Armando Vannini から、今年は盛会を予想されるのに残念だったが致し方がない、1959年度には是非来よう、との連絡があった。それを実現するのに、アフリカ滞在を約半年とすれば、大へん好都合で、帰路フランスからスペインに入り、スイスで Prof. Jose de Azpiarn をジュネーブに訪ね、アルプスを越えてミラノに入り、それからシエナに出るという予定になっている。出来ればスペインに入る前にフランスからイギリスに渡りたい。

私を幼い頃から知っている兄嫁が、私を性来我儘で育ち、末っ子なためにいつも我儘を通し、今度という今度は最大の我儘を通すことになった、而もその我儘がいつでも通るのだから不思議だ、と家内に言ったそうである。我儘で文科を専攻し、更に医学に転じ、今度は余技で以て海外に渡るといふのだから、最大の我儘と言われても仕方がない。誰に迷惑をかけるのでもないのなら我儘もいゝけれども、その度に迷惑を舍兄達にかけ通しなのだから、全く兄嫁の言う通りで、頭が上らないのである。しかしこの我儘を最後とし、出来るだけ多大の成果を上げて帰り、舍兄達に安堵の胸を撫で下してもらうように努力したい。

本誌の誌友各位に対しては不在間の本誌発行について或は御迷惑をかけることが再々あるかも知れませんが、しばらく忍んでいたよくことにします。旅先から、又帰朝後その責は充分に果たしたいと固く心に期しています。

ではいってまいります。

渡 欧 の 御 換 拶

高 嶺 巖

一昨年でしたか、高橋先生の御尽力でウィーンに留学、Prof. Jakob Ortner に師事する話がまとまったのに、オルトナー教授の心臓病がつのられたために中止となりました。その頃からヨーロッパ留学のことをこいねがっていたのですが、この度はからずも第20回国際ギター音楽家会議に招かれて渡欧することができるようになったことは光榮の至りです。これはひとえに、村田武雄先生のあつい御指導によって殆ど毎年リサイタルを開き、その成果が主催者側に認められたのかと思います。それも高橋先生が、筆まめに海外と通信せられ、国内のニュースを海外に報らせて下さって居られるらしいので、認められたのかもわかりません。とにかく、ちみにまじめに根気よく努力すれば、どこかで誰かよいつか認めてくれるということがわかりました。努力はいつか報いられるというのはほんとうのこのことです。

先日 NHK 第二放送音楽クラブのゲストに招かれました。当然高橋先生も招かれているものと思っていたところ、お出にならなかったのも私など出る幕ではなかったと思ったのですが、小西先生からこの番組は急にきまったし、高橋先生と打合せたり、お招きすることが時間的に許されなかったという事情をおききして、結局あのようにおしやべりしてしまったのです。後に高橋先生がこの放送をきかれ、あれでよかったと申されたので何かほっとした気持ちがありました。

この会議は音楽祭でもコンクールでもなく、会議ということに重点がおいっているようです。勿論 John Williams とか Karl Scheit などの新進ギタリストが参加するので、いきおい技を競うという場面も展開されましょう。しかし各国代表の報告や講演があり、ギター音楽の進歩発展の方法が討議されたりすることも重要な行事になっています。パッサ音楽の夕などは、何とかいう教会のホールで開催されるということです。こういう会議に、高橋先生が参加されるので私達は正直いって大いに助かります。若し高橋先生がリーダーシップをとって下さるのでなかったら、私など参加する勇氣は持ち合せなかったかも知れません。会議の重要な部分を高橋先生に受け持っていたら、私達は花やかな舞台で演奏すればいいのですから、ずるいみたいなものです。しかも高橋先生は舞台にも立たれるので、大へんな重荷なわけで、何から何まで高橋先生におんぶするのが申しわけない気がします。

尚今度の派遣で外務省あたりは3名を参加させることに難色を示し、高橋先生はその交渉に当って一方ならぬ御心労をなさった由、もれ承っております。こういう場合にわが国にも強力な連盟組織があって、こちらから進んで代表を送るという風になることが望ましいと思います。今でも方々に連盟や協会があるようですが、それらが分立するのでなく一本化されなければ、今後は国際会議の参加など順調に進まないのではないかと気づかれます。

ベルリンの検舞台を考えるとさすがに胸が踊ります。コンクールとはちがって審査員の耳がそばたち、目が光ってはいません。しかし会場に集る人達の凡てが審査員だと思って、私はベストを尽すだけです。と同時に、なるべく多くの会議に出席し、多くを知り、多くを学んで帰りたいと思います。

海外ニュース

アメリカ：—

このほど Guitar Review 誌が作曲コンクールの規定を発表した。これはニューヨークのクラシックギター協会と同誌が共催するもので、主意書によると「広い汎用性に亘って新しいギター音楽の制作を促す」ことが目的である。そしてこれは Carl Sandburg の「歌の鞭」に収められている西部の民謡 Colorado Trail をテーマとする作品であることが規定されている。サンドパークについては本誌第2巻第4号（通刊第10号）で写真入りで紹介したから記憶している誌友も少くないと思うが、アメリカの民衆詩人として名高く、リンカーン伝などの伝記作家としてピューリッツァー賞をうけてい、数々の小説によってアメリカ文壇に異彩を放ち、ノーベル文学賞の有力な候補にもなったことがあった。しかもサンドパークはギター歌手として早くから知られてい Decca 盤の Lp が出ているほどに有名であり、西部歌曲集を2冊も編集出版しているのである。

このコンクールの締切は本年11月末日で賞金は300ドル、審査員はサンドパークと Guitar Review 誌主筆の Vladimir Bobri とニューヨーク図書館音楽部長 Spague Smith とニューヨーク高等音楽学校の作曲科主任教授 Erich Katz これにリュート演奏家として名高い Susanna Bloch の5人である。この成果は一般から非常に期待を持たれている。

Laurindo Almeida から約束通り O. Cascador を贈ってきた。何れ本誌の添附として紹介したいと思っているが、粗朴なメロディに配する単純だが効果のあるギターの使用法、いかにもアルメイダの本領を十分發揮している。前にもワルツのマヌスクリプトを贈っていたときながら、まだ

発表の機会を得ていなかったのに、次の作品がとどいている。それに添えて昨年 Criterion Music Corp. から出版された Guitar tutor, An Up-to-Date Classic Guitar Methode を贈られた。その翻訳権も譲渡されたので逐次本誌に発表するが、この教本を繙いて驚くことは、その引用に先人の作品をのせていないで、凡て自作で埋めていることである。これは文字通りオリジナルなアルメイダの業績である。

原本はアルメイダの母国語（ブラジル—ポルトガル）で書かれたものらしく、アメリカ版は Jack Duarte の英語訳によっていることが序文に書いてある。この教本の特色の一つは現代の新しいスタイルの和音を取り入れていることで、この点全く異色のものである。アルメイダは映画音楽に非常に興味を持って数多く出演しているが、ワーナーブラザーズの「スター誕生」にも出ていたことが、この教本ではじめて判った。この映画のテーマ Amor Flamenco がこの教本に出ているし、Capitol の Lp に入っている Crepusculo en Copacabana や Preludio y Tremolo や Invention in two Parts なども附録となっているが、アルメイダのモダンな手法を知るに好適である。Calliope—叙事詩、Clio—物語、Euterpe—抒情詩、Melpomene—悲劇、Terpsicore—夜明けと歌、Erato—エロチックな詩、Polymnia—讃歌、Urania—天体、Thalia—喜劇という9の muse の神をたゞえる断章は何れも10小節足らずの小品だが、アルメイダの詩心をうかゞい知ることが出来る。

この新しい教本に讃辞と喝采を送る。

Vicente Gomez の主宰する カリフォルニアのスペイン芸術アカデミーで去る3月14日に門弟 Richard Polidor のデビュー演奏会が行われた。写真でみるポリドールは20才そこそこの青年である。曲目は

G. Sanz パパーヌとガリアルダ
 A. Scarlatti ガボッタ
 J. S. Bach 前奏曲とメヌエット
 F. Sor アレグロ
 F. Tarrega マリアとアルハンブラ
 V. Gomez 宿屋にて、ひまわり、バラ
 M. Torroba ファンダンギリョ
 Villa-Lobos チョロ、前奏曲第2番
 J. Turina ソレアレス
 I. Albeniz 物語

イギリス：—

Peter Sensil の近信によると Ken Sykora と共同でギター事典の編集中だから、日本に於けるギター音楽の項を筆者に担当してほしいとのこと。シコラは誌友がすでに御承知の通りロンドンの BBC 放送で、ギタークラブという時間を長いこと持ってギター音楽の普及に尽力してきたのである。Lp を主とし、時々すぐれた演奏家をゲストに迎えて生まの演奏もきかせる趣好であった。これはブラジル放送の Ronael Simoes の数年に亘るギターレコード放送に匹敵するラジオ放送として評判が高い。シコラの演奏家としての腕のほどは承知していないが、ギターの物知りとしては屈指の人である。シコラとセンシールの共著だから好個の文献となること疑なしといえよう。日本の演奏家、教師、楽器製作家、愛好家などの資料を送るわけだが、誌友各位の協力を願う次第である。

尚センシールから Yupanqui, Falu, Fleury の伝記を報らせてほしいと言ってきたところをみると、イギリスとアルゼンチンとの交流はうまくいっていないことがわかる。

前に筆者がギター師弟論(第4巻第3号)をものして、Julian Bream を Andres Segovia の系譜に加えたところ、Dr. Boris Perott から、ブリームはセゴヴィアの弟子

ではないと示摘されて訂正したことがあった。最近 Guiter News 誌43号に McIntosh Patrick が「ブリームと語る」と題する一文を掲げているが、自分は屢々セゴヴィアの弟子と言われ、自分の演奏をちに聞いた人でさえセゴヴィアの弟子だからあゝいう演奏をするのだと言っている、1947年から1950年の間にセゴヴィアからテクニクや運指について助言を得たことはあったが、彼について学んだことはなかったし、第一セゴヴィアが自身自分が彼の弟子であるとは言うわけがないと思う、と述べている。更に、セゴヴィアの助言は自分のギター探究に大いに役立ったことは確かであるが、自分は自分のテクニクを自分で仕上げたと思っている。例えば右手の扱い方でもセゴヴィアは絃と直角だが、自分は音色の効果をねらって角度を変えている、とも述べている。なかなか自信たっぷりの発言であるが、かつて師 Dr. B. Perott が第二のセゴヴィアでなく、第一のブリームたれと言って励ました言葉を思い出すと、首肯出来るブリームの言葉である。そのように誇り高い男であるらしい。今秋は北米に演奏旅行をするという。

Dr. B. Perott の遺児 M. Perott の手紙によると11月に John Williams のリサイタルがロンドンであるから、その頃渡英されたいとのこと。ジョン・ウィリアムスは当年16才、今年も Accademia Chigiana に出かけたらしく、彼こそ正真正銘の Segovia 門下である。尚筆者と高嶺をロンドンのギター協会の月例会の演奏会に迎えたいとも附け加えてある。

亡父 Dr. B. Perot の伝記小説 Price of Happiness はいよいよ完成に近く訳読権を筆者に一任すると言ってきている。近くその一部分を本誌に抄訳したいと思っている。

イタリア：—

ミラノの Miguel Abloniz の手紙によるとこの度 Ricordi との契約が成って、かつてアルモニアに提供した Bailecito と Capriccio N.3 は爾後 Ricordi に版權を与えたから承知して欲しい、従って上記二作品はアルモニアバックナンバーの添附以外は発売を中止されたい、これを犯すと出版法違反になることを認知されたい、と念入りな申入れである。

日本は特殊国語だからという身勝手な考え方から翻譯に関して至ってのん気に考えがちだが、海外では版權保持に対して非常に厳である。教材用の青写真でさえも海外版として指摘されることは先刻ストマイの Dr. Selman Waksman の例で知る通りである。この度ベルリンの展示会に出品する楽譜教本の選択もその点を顧慮したつもりである。藪をついて蛇を出す愚をさけたかったからである。

アプロニスの作曲活動は最近ますます活潑である。イタリアギター協会主催の作曲コンクールに1954年と1957年の二度入選したことは既に本誌で紹介済みである。最近の Ricordi 版では初歩者向けの 4 Preludes、と多音様式の 4 Pieces Recreativos の外に、Julian Bream に捧げた Gige、Villa-Lobos に捧げた Improvizacion、それにフラメンコ手法による Tango Andaluza など何れも名作の名にはじない。その外編曲ものにも見るべきものが多い。

Accademia Chigiana の事務長 Prof. Armando Vannini から私信に添えて Bulletin dell' Accademia Musicale Chigiana, Anno XI, n. 2 を送られた。Conte Guido Chigi Saraci や Alfred Corto や Vito Frazzi や Ildebrando Pizzetti の写真が出てい、アカデミアの活動が手にとるようにわかって楽しいパンフレットであ

る。筆者の手元を集る音楽誌の中の異色のものゝ一つでもう十数冊たまった。

ドイツ：—

ベルリンの第20回国際ギター音楽家会議の準備で忙殺されている Siegfried Behrend から近作を数曲寄せられた。Hans Ragotzky 版の Greensleeves (エリザベス一世時のイギリスの古歌)、Estudio Italiano, 2 Miniaturen で、前の曲は筆者が、後の2曲は高嶺がベルリン会議の演奏会で発表することになっている。それにベーレンドの編曲した Vivaldi のハ長調マンドリン協奏曲のスコアも送ってきたが、これは日独交歓マンドリン演奏会で W. Sommer を独奏者として筆者に指揮をさせたいふみがあるのではないかと推察される。

この外自家版の Invention が送られたが、5章の中の最初の3章 Giocosio, Moderato-legatissimo, Andantino は開会第1日の招待演奏会でギリシアのアテネ音楽学校ギター科主任教授 Prof. Charalambos Ekmetzoglou と筆者が二重奏することになっている。

主筆 Fritz Walter Wiedemann を失ったミュンヘンのギター協会は、引きつゞき機関誌 Gitarrefreund (第9巻3—4合併号)を出した。添附に Nap. Coste の作品51のワルツと作品52のベートーベンのソナタの編曲を、初版のまゝ再版して出した。まことに好ましい添附である。主要記事は Hans-Jürgen Schulz のギター製作論で前号からの続き。尚、亡くなった主筆の遺志に基いて協会創立(1949年)以来の維持会員に銀メダルが贈られた。受牌者名簿に Hermann Hauser, Simon Schneider などの名が見えている。

ギター製作家の第一人者 Hermann Hauser の名は A. Segovia の愛用によってま

すまず高名となったが夫人 Helga との間
にこの 2 月 18 日に男児が誕生した。Herm-
ann Helga Markus と命名されたが、この
子が長じてギター製作を志せば 3 代に亘る
世襲の名工が出る と期待されている。

スペイン：——

やゝ旧聞にぞくするがバルセローナの
Pena Guitarristica Tarrega 主催で次の
ような演奏会があった。

3 月 29 日 Fransisco Gonzalez Sanchez
のリサイタル。D. Scarlatti, J. S. Bach,
M. Torroba, Tarrega, Villa-Lobos, Al-
beniz, Granados, Turina の作品が演奏
された。

4 月 9 日 Jose Tomas, まだ若いギタリ-
ストで型の如く Ruiz de Ribayaz, R. de
Visée, Rameau, Bach, Sor, Villa-Lobos,
Tarrega, Barrios, Ponce, de Falla,
Albeniz の作品がプログラムを飾った。

4 月 26 日 Manuel Cubedo, ジュネーブ
のコンクール入賞以来俄かに有名になった
クベドは周知の通り Prof. Emilio Pujol の
愛弟子。Tarrega の流れをくむ指頭奏者
で、柔かい音性と豊かな表現力が評判であ
る曲。目は Sanz, Roncalli, Weiss, Bach,
Pujol, Tarrega, Villa-Lobos, Barrios,
Granados, Albeniz の外に Ignacio Cer-
vantes, A. Fort という新人の作品が見え
ている。セルバンテスのはキューバ舞曲、
フォルトのは前奏曲でおそらくこれが初演
かと思われる。

ギリシャ ——

去る 2 月 10 日アテネで 2 人のギター教授
の二重奏演奏会が注目された。ウィーンの
Porf. Karl Scheit とアテネの Prof. Cha-
ralambos Ikmetzoglou の 2 人によるもの
で、Lechthaler, Burkhart, Scheidler,
Telemann, Sor, Albeniz, Pujol の曲が演
奏され、一部の録音が 3 月 27 日ラジオ・ア
テネの電波にのった。

トルコ：——

トルコのギター流行は大へんなものらし
くドイツの Siegfried Behreud を 2 度も
迎えてリサイタルを開いたが、5 月 11 日ア
ンカラのモダンな体育館で行われた学校
音楽祭で Tugsavnl という少女のギターが
賞を得た。ツクサブルは Can Aybaris の
門下生で、アルベニスの物語を演奏して受
賞したのであった。将来を期待されている
由。

エジプト：——

中近東のギター熱は、ギターの発祥地で
あるのをおもえば偶然ではないが、それに
しても大したもの、1 月 28 日に首府カイ
ロで Narciso Yopez のリサイタルは超満員
の盛況だったらしい。1 月 14 日と 29 日には
アレキサンドリアでリサイタル、これも超
満員だったようで、Rameau, Scarlatti,
Bach, Sor, Tarrega, Albeniz, Turina,
Tadesco, de Falla の外に A. Loro, Mu-
mos, Molleda の曲がプログラムに見えて
いる。

Pascual Roch 著

伊東尚生 訳・月村嘉孝 註

最新ギター奏法 (タルレガ教程)

第一巻 第二巻 定価 各巻 600 円 送料 40 円

季刊「フレット」創刊号、第 2、第 3 号 各冊 100 円

申込所・岐阜市梅河町一丁目六 岐阜ギター音楽研究会
(振替名古屋 6074)

取次所・宮城県亙理郡山元町坂元 高橋方 アルモニア

国内ニュース

「ギターの友」制定のギター音楽功労者表彰の第一回に中野二郎氏が諮問委員会の推薦投票によって決定し、このほど発表された。まことに当を得た決定で同慶至極に存ずる。長年に亘って斯業のために尽された業績は枚挙に遑がないほどである。戦前すでにアルゼンチンギター協会の特別会員に推され、1954年度のイタリアギター協会主催作曲コンクールに入選し、海外ではすでに有名であった。武井文庫、沢口文庫を凌ぐ中野氏の楽譜文献のコレクションは、ヨーロッパをあげて戦禍に見舞われた今日、世界屈指のものといっても過言ではあるまい。而もそれが整然と整理されてい、慎重に保存されている。演奏方面の活動もさることながら、作曲活動も童謡、マンドリン、ギターと多方面にわたり、且つ名古屋放送管絃楽団の常任指揮者としての多忙のかたわら、アルモニア編集顧問として毎号執筆され、常に斯界の木杵として努力されていることは周知の通りである。海外でも恐らくその比を見ない研究家である。筆者はこの受賞に心からの讃辞と喝采を送る。

「ギターの友」9月号(37号)には小船幸次郎氏の音楽の歴史、大沢絆、小原二郎、奥田紘正の三人の苦節十年を語る座談会記事、ブホールのギターとその歴史、シャープのギター製作法などが出ている。

「ギタラ」は16号を出した。主筆は Eduardo Y. Obara 即ち小原安正氏である。エドアルドというのは洗礼名であるのかどうか承っていない。デ・ラ・マーサのギターと其の歴史は、「ギターの友」のブホールの向うを張って興味ある読みものとなっている。第7回ギターコンクール入賞者の言葉や審査員の感想も一読に値する。ゴンサ

レスの楽(第二集)に半分のページをさいている。なるほどゴンサレスの反響は大きかったが、そして当時はゴンサレス・ブームに押しながされた形だったが、コロムビアから来朝記念発売のLp(ダイヤモンドシリーズ ZL-75, 1,000円)によって大よその価値は決定したと言っている。ゴンサレスはまだ大家の域に至らず、現在では第2のセゴヴィアとか、セゴヴィアにつぐ大家の一人などというのは宣伝用語でしかなかったことがはっきりした。勿論ゴンサレスの熱意と努力は将来大成するかも知れないが……。

「ギター音楽」は渋谷一雄氏の熱心な努力によって発刊一周年記念号を出した。2頁の欧文記事を加え、花上雅優作曲夕暮の歌を添附したり、なかなかの努力がうかがわれる。

最近楽譜や教本の出版が目立ってきた。どの教本を選んだらいいのかという問合せが来るが、一長一短で標準版というか決定版というか、そういうのが見当たらない、と返事するより外にない現況である。国際音楽出版社(東京都新宿区西大久保1の414)の曲集出版が目立っている。

国藤和枝・ロマンチックムード音楽集
酒井富士夫・中南米音楽とフラメンコ集
京本輔矩・スペイン音楽集

” ・前古典音楽集

” ・クラシック音楽集

横尾幸弘・ギター新教本 等々

国藤編著のロマンチックムード音楽集などは実によく出来ている。扉にジャンソンの芦野宏が「僕は国藤さんの音楽に対する真面目な態度が好きだ。そして僕はほのぼのと漂うロマンの香りに酔いたい。」という讃辞が見えている。この曲集とはあまり関係のない言葉だが、中でも国藤さん自身の

編曲がよく出来ていて、気軽に楽しめる。外の曲集を手にしていないので、比較にならないが……。

9月7日の放送について松本太郎氏から次のようなお便りをいただいたので紹介する。――

放送を御聴き下すって有難う。あの放送は、別の形でやり度いと思って音楽クラブ担当の三善君に申込もうと大分前から幾度もNHKへ会いに行ったのですが六回計り間を置いて行ったのに何日も不在で会えなかったのです。そこで何日迄も埒があかないので手紙で申込みましたら間際になって忽々きまったので十日の午前七時半迄かゝって原稿を書き、四時間寝てNHKに行き録音したのですが、おしゃべりが平板で面白くなく、音楽クラブ向きでないの趣向を変えようという事になり、秋山邦晴君と対談という事になりました。所で僕のプランは「戦後のギター音楽」という題で日本と西洋と二回に分けるつもりだったのですが三善君が一回にまとめて呉れというのであゝいう事になったのです。

所があのお対談のプランは秋山君が勝手に立てゝしまったので（僕と打ち合わせる暇がなかったので）僕の二回の録音を一回にまとめてしまった事と相待ってすっかり変った形になってしまったのです。小原、高嶺両君に出て貰う事も十日にきまったので十一日に突然よび出して夜来て貰って録音して貰った上秋山君のプランにはなかったのですがその場で対談の中にもはいて貰ったのです。もう少し時間に余裕があったなら勿論貴方にも加わって頂く筈だったので、それが出来なかったのは非常に残念でした。

そういう訳で僕の録音した以外のものが加わって時間を喰ったのでしゃべり度い事を大分遠慮しました。あの放送も実

際は五十分位のものを録音したのですが一部分カットして三十五分にちぎめたのです。僕は例の通り夜更かし朝寝坊なので放送を聴かなかったのですが兎に角ギター音楽を一般に認識させるのには役立ったかと思いますが如何なものでしょう。

日本ギター教授者協会（大阪）委員長近藤恒夫氏から次のような抱負を伝えられた――。

1. コンクールを全国的なものにするよう努力する。
2. 同協会創立十周年を記念して11月に会員の合同演奏会を開催する。
3. 編集者の都合により「ギター芸術」誌は休刊する。日本には良いものが一又は二あればよいと考える。
4. 今春は青年リサイタルの第1回として武井達也氏の会をもったが、10月下旬にはその第2回として西条道孝氏の会を持つことを決定している。
8. 今までの作品を整理し、三重奏（5曲）を出版し、ついで独奏曲を逐次刊行する。先般 Gonzalez に献呈して大へんよろこばれたファンタシア「虞美人草」も曲集に加える。

尚近く小品を筆者にデディケートされる由大いに期待している次第。

恒例の九州ギターコンクールが左記によって行われた。

主催・九州ギター音楽協会

日時・10月5日（日）

場所・中央公民館（福岡県庁裏）

課題曲・ジュリアーニ作品48より練習曲

審査員・中山太郎、麻生幹夫、坂本三郎、

岩橋正和、麻生律男、湯崎敬二、

松本憲一、西野 博

入選者左の通り決定した。

第1位 今井 恒太（福岡）

第2位 恵良 賢次 (小 倉)
第3位 朝倉 年春 (大牟田)
次 位 田辺 進 (熊 本)

9月8日丸の内ホールに於ける横尾幸弘スタジオの研究生発表会の出演者は川生明、鈴木董令、山田馨、小黑勝文、金丸喬、落田昇、宮内董次、笹川スミ子、板倉鼎、立石照子、小浜受子、小泊純、木下喜美子、小津邦夫、斎藤茂、坂倉弘、康佐々木邦夫、鈴木富雄

8月30日神戸YMCA音楽会、ギターと歌の夕に中川信隆、大西慶邦、右藤寿和、三根良子(ピアノ)、竹本待江(ソプラノ)が出演し、藤田光彦が司会、解説を行った。ギターとピアノの二重奏でディアベルリ作品の小品集より8曲、ヴィヴァルディ作協奏曲が演奏されたが、後者は、おそらく本邦初演。ギターとピアノの組合せは、もっともっとと取上げられていゝ。ヨーロッパにはこの組合せの曲が可なりたくさん出版さ

れている。

9月21日労働会館に於て関西ギターグループ主催各ギター教授所(山内広志、大西慶邦、田中清正、竹村榛各、中川信隆、松井徳次)の門下生合同発表会があった。出演者は向井道夫、桎原宗男、桑田圭司、花城信子、鈴木信夫、松浦梅春、山口芳康、牧瀬則因、池田稔、箭原幹雄、宇治宏、辻内哲雄、猪俣章三、宮内正実、松永義雄、前岡勝、大森守雄、沢口恒夫、友井勝。

武井守成十周忌記念の行事の一つコロムビア吹込は9月8日小林恵吾氏指揮で初秋の唄と微風、同9日がエタノ・コメリー指揮で豊年、踊る小花、雨とコスモスが行われた。ギター独奏には伊藤翁介、小倉俊、小原安正が決定した。武井氏のギター曲はスチール弦で作曲されたのだから、伊藤翁介氏の演奏にはその点でも期待されるわけである。

(5頁よりつゞく)

明日教えることを今日仕入れるという人まである。又わざは出来ても師匠としては落第という人もある。師匠对弟子の関係も昔とはすっかり変ってきていて自動車の運転でも習うようなつもりで月謝さえ払えば元々といった考え方が多い。弟子「之でいゝかね」先生「結構です」ふすま一つ距てゝきいていればどちらが先生だかわかりはしないし、少しも結構ではないのだが、こういった風景が多くなってきた。そうかと思えば「すみませんすみません」と謝ってばかりいるのがある。「習うのはあなたですよ」と言いたくなる。又之は一種の趣味かも知れないが道場荒しを気取って二三曲演奏に及んで揚々と帰ってゆく英雄もある。全く世も末という感じである。私は師匠を持たなかった代り万物万象之師と心得ているつもりなので別に腹は立たないが近頃のこととはひどく勝手が違って唖然とすることが多い。昔の武芸や日本の芸事に(之は今でもある)何々流というのがあってやかましいようであるが、何かスッキリしないのはどういうわけなのであろう。もう一つおかしなものに免状がある。日本ものにあれば西洋ものにだってあってよいわけだが考えただけでコッケイである。私にも学生時代に貰った水泳の免状があるが、腹に巻きつけて行ってももう泳げないだろう。

木村喜久弥 (静岡市)

御渡欧の手続き、準備などで大へんだらうとお察しします。「猫の本」は目下校正中で御出発前にごらんに入れたいと思っています(法政大学出版局より発行)。推薦していた先生に報いるために、全力をつくして充実した内容にしたつもりです。

最近Capitol T-10134 Brazilian Guitar, Luis Bontasを手に入れました。1922年リオデジャネイロ生れのルイスボンファスのテクニックはすばらしいものです。一寸ゲテ趣味かも知れませんが、タンボリンやタムタムのような打楽器を模したり、パラライカやハーブに似た音を出しているのは面白いです。先生は既にお持ちでしょうが……。

中林淳真 (竜ヶ崎市)

御出発を前にして御多忙のこと、推察しております。

私は9月21日から銀座の銀パリでジャンソンの丸山明宏君とスペインギターアルバムをやりますので、今その練習に入っています。その主な曲目はソレアレス、ファルカ、サンブラなどです。丸山君との舞台は明るく楽しみです。

それが終ると10月13日室蘭音楽協会主催で私のリサイタルが行われることになりました。曲目はアルベニスのアストリアス、ディアベリのソナタ、バッハのプレリュードなどです。

先生の御出発前に一度お目にかかりたいと願っています。

右藤寿和 (西宮市)

関西各ギター教授所の門下生合同発表会のプログラムをみてお気付きのことと思いますが、カーノのアンダンティノ、モツアーニの主題と変奏を三人が演奏しています。曲が悪いというわけではありませんが、苦しもピアノの門下生発表会だったら恐らくソナタ、ソナティネ、エチュードが大半を占めるものと思います。ギターの勉強をする人の中には正規の教程をふむ人が少いので、こういう結果が出てきたのでしょう。それではギターの教程としてどういふのがあるかと問われると、これに答えられる人は恐らく少いだろうと思います。ピアノのバイエルのようなはありませんし、大半はカルカッシ教本によっていて、少し練習するとすぐ曲に入ってしまう。ドイツ、スペインなどの音楽ではどうなっているか、ぜひ見ていただきたいと望みます。

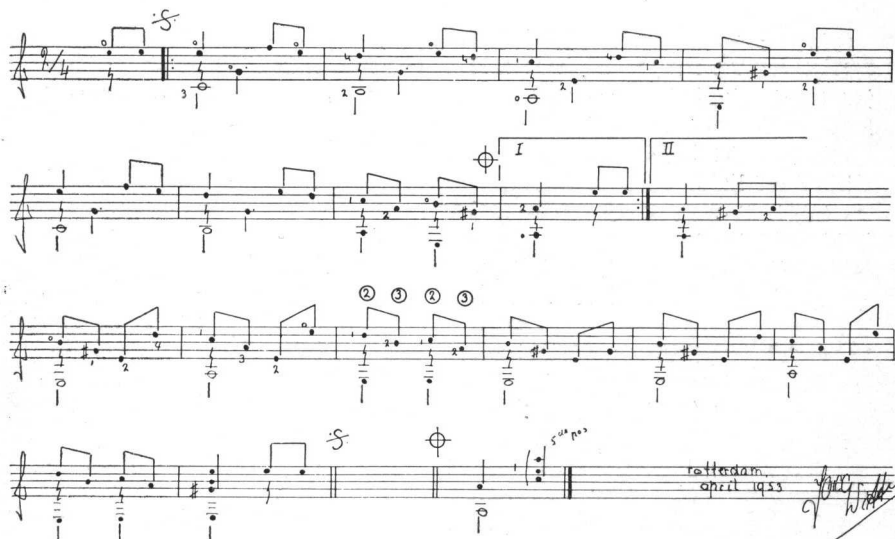
首藤徳三 (岐阜市)

本誌前号国内ニュースに「ギターの友」「ギター音楽」とともに、わが岐阜マンドリン・オーケストラ機関誌「フレット」の紹介があったが、『誌の在り方』についても、本誌ははじめ夫々反省自粛の必要がありそうである。』と妙に暗示的に結んであったのには、聊か気になるほど意味があれこれと感ぜられたのは、私の僻みであろうか。……弁解がましいが、私どもはどの面からしても素人の域を脱せぬことであるし、斯界に貢献するなどとは、なかなか及びもつかぬ。しかし、とにかくにも一冊の誌となるまでの苦心と努力は、経験する者のみを知る実には容易なことではないのである。誌の内容が、例えどのようであろうとも、同じ道を行こうとする同志のことゆえ、寛大な目で見ていただきたいことを大方の皆さんへも願ひするのほかないのである。

一言お寄せする次第である。

Pierrette

Jacq Witte



東レ ナイロン

S 楽絃発売!!

第20回国際ギター音楽祭展示会出品

東洋レーヨンの技術陣に依り新しく完成されたこの楽絃の出現により高価な輸入絃の必要は全くなくなりました。
地方の方で入手困難な場合は直接当方へ御申越下さい。

東レナイロン楽絃
各種 楽 絃 製造発売元

小 石 川 商 会

四日市々河原田町2365
電話 河原田局 18 番



編集後記

渡欧を間近かに控え多忙な時間をさいてこゝに第5巻第5号を編集し、おとどけます。

作曲コンクールはついに入賞者を見出すことが出来ませんでした。しかしアルモニアとしてはこのプランが無益であったとは思っていません。応募者には相すまないような気がしますが次の機会をねらって作曲の勉強をつづけて下さるようお願いします。その一助にもと思って審査にあたられた中野、小船両氏に御批評を書いていただきました。

前号時評で少しNHKを叩きすぎたかと気にしていましたが、日旺の音楽クラブで35分間ギターを取上げてもらったことはギターを普及し、認識させるのにいい機会だったと、感謝しています。この先もNHKはじて民放ももっともっとギターに気をくばって取上げてもらいたいと希望します。

渡欧を控えて小原君が病床にたおれ、ついで高嶺君が事故で入院するということになり、私一人で気をもんで、国内の連絡や打合せ、海外との交渉に全く忙しいことでした。それでも3人揃っていよいよ壮途につくことになりました。これも誌友各位の御声援の賜ものと感謝する次第です。新聞社から会議の記事を依頼されたり、音楽之友から Dr. Albrt Schweitzer との対談を希望されたり、この頃一しは責任を負わされ、自分の役目が何となく重い気がしています。大かたの期待に報いるために張切っています。

来る12月14日武井守成氏の十周忌を記念して日本コロンビアが「マンドリン・ギターによる日本の旋律」という10吋LPを発売することになりました。大へんいいものが出た上ったそうで関係者一同大いによろこんでおります。誌友各位のコレクションにぜひ一枚加えることをおすすめします。地方の方々のためにアルモニアでも取次ぐことになりましたからどうぞ御用命下さい。(17頁広告参照)

法政大学出版局から私の第三の著作「医学懺記」が上梓されました。御希望の方にサインをしておとどけます(定価300円)御愛読いたゞけたら幸いです。

次号からは編集顧問の三氏におすがりすることになります。会議のニュースは間に合はずですし、写真版も出来るだけ豊富にとり揃えたいと思っています。それに次号には十回忌にあたる武井氏の追悼の交も揃えたいと思っています。

では元気で行ってまいります。

(高 橋)

誌費1冊 100円 半年分3冊 300円(〒共) 一年分6冊550円(〒共)

昭和33年10月13日発行



発 行 者 高 橋 功

発 行 所 宮城県亘理郡山元町坂元
(振替仙台 8681)

印 刷 所 今 野 印 刷 所
仙台市土樋 75